# 学位論文内容の要旨

北海道開拓記念館　主任学芸員　小林　孝二

## アイヌ文化成立期から近世期末におけるアイヌ民族の建築に関する研究

アイヌ民族の建築に関する建築学の立場からの研究史を概観すると、主要な研究は1930年代から40年代に限られ、以後、研究は停滞し、調査対象となった居住歴を持つ住居の建築年代も20世紀初頭が下限と考えられること、19世紀末以前についての論考の根拠は古老からの聞き取りによる推定が中心で、客観的・系統的な研究は行われていない。

発掘調査を資料とする研究を見ても、建築学の立場からのアイヌ文化期を対象とする研究は行われていない。建築学の立場からのアイヌ民族の建築に関する研究には、アイヌ文化成立期（13世紀前後）以後19世紀末までの大きな空白期間が存在し、現在の復元建築と19世紀末以前の建築についての実証的な比較・検証も行われていないのが現状である。このような研究の空白期間は北海道の建築史を通史として捉え理解するためにも今日残された重要な課題であるということが出来る。

本研究は北海道の建築史研究において先行研究が少なく、近年研究活動が停滞しているアイヌ民族の建築に着目し、その特徴について建築史の視点を中心としながら建築物を生み出してきた建築技術・工法・工程など建築生産論の視点を積極的に取り入れたより広い意味での建築学の立場から考察し、アイヌ文化成立期（13世紀前後）から近世期末（19世紀後半）におけるアイヌ民族が営んできた建築活動とその所産である建築の特徴を明らかにし、同時に近代以前の建築と既往研究や現代の復元された建築の共通する点と異なる点についても検証することを目的とする。近代以降（19世紀後半）から19世紀末までの残された研究の空白期間については資料の制約から本研究の対象としない。

研究対象資料はアイヌ民族の建築を描く近世期の絵画資料とアイヌ文化期を対象とする発掘成果（発掘報告書）とし、従来個別に少数の資料が評価されるに過ぎなかったこれらの二つの資料群を網羅的に集成・整理することによって、アイヌ文化成立期から近世期末のアイヌ民族建築を研究するための基礎資料を構築した。

近代以前に描かれた絵画資料は居住歴を持ったアイヌ民族の建築の「実物」やアイヌ民族自らによる記録資料が残されていないことなど資料の制約が多い中で、現在、近代以前のアイヌ民族の建築を図像として確認できる唯一の貴重な資料である。

アイヌ文化期を対象とする発掘資料は、前記の絵画資料では確認できない18世紀中期以前のアイヌ民族の建築を確認できる現在、唯一の貴重な資料である。

資料の分析にあたっては、絵画資料や発掘資料から確認できる構造、形態、材料、平面形、規模、施工工程と基準寸法といった研究対象資料群から確認できる要素を中心として考察し、室内空間、集落の立地や集落における建築の配置や階層性などの研究対象とする資料からは分析できない要素については本研究から除外した。

本研究によって明らかになった近代以前のアイヌ建築の特徴は以下の通りである。

①住居は平地式、住居に付属する建物は高床式が主体で、住居と倉の高床上本体の外観・

材料は共通する点も多い②平地住居の平面形は付属屋を伴わない単室形住居が先行し、その後、付属屋を伴う平面形が現れ、両者は併存し、付属屋を伴った住居が主体となって行った③住居の柱配置は短辺の柱間が奇数のものが多く、短辺中央の柱間が出入口や神窓であった可能性が考えられる④柱の建立方式は住居が全て打込形式、住居に付属する建物は堀込と堀込・打込形式が併存する⑤柱間寸法は住居では人体寸法による基準寸法の存在が考えられるが付属建物では確認できない⑥住居の建築工法は小規模なものは地上で小屋組を組み立て柱上に乗せる。大規模なものは柱の上で小屋組を組み立てる⑦住居は小径木材で軸組・小屋組を組立て、小屋構造形式は多様で室内に梁を架けないものも多い。

以上のように近代以前のアイヌ民族の建築の特徴を明らかにし、同時に現在の復元建築との比較・検証から、外観・材料などに共通する点がある一方で、現代の復元建築とは異なる多様な外観・平面形態や小屋組・軸組構造の建築が存在したことを明らかにした。

本研究は全７章で構成し、各章の具体的な構成と要旨は以下の通りである。

**第1章　研究の背景、目的、方法と論文の構成**

本研究を構想するに至った背景、研究の空白期間の存在とその期間を対象とする研究の必要性、研究の目的を明確にし、研究の方法を示した。同時に本研究の対象とする研究期間、基礎資料を明確にし、本研究の論文構成について述べた。

**第2章　アイヌ民族の建築に関する既往研究の整理**

アイヌ民族の建築に関する既往研究について、建築学研究者による研究・論考と関連分野の研究者による研究・論考に区分して年代順に論旨を整理し、それぞれの論考の特徴を述べて研究史を把握し、既往研究の成果と本研究の研究課題をより明確にした。

**第3章　絵画資料に描かれたアイヌ民族の住居**

近代以前に描かれた絵画資料からアイヌ民族の建築が描かれた図像を網羅的に集成・整理し、これらの資料の中から住居に関する図像の特徴について分析・考察し、近代以前のアイヌ民族の住居の特徴を明らかにした。同時に、現在の復元住居や普及・啓発書の記述とは異なる構造・形態の住居が確認できることを明らかにした。

**第4章　発掘住居跡から見たアイヌ文化期の平地住居**

アイヌ文化期を対象とした発掘報告書から発掘された建物跡の資料を網羅的に集成・整理し、これらの資料の中から住居跡の事例を抽出してその特徴を明らかにした。さらに建築工程や寸法体系について分析・考察し一定の基準寸法が存在した可能性を示した。

**第5章　絵画資料と発掘資料から見たアイヌ民族の住居に付属する建物**

絵画資料、発掘資料から、熊檻・飼育檻と倉など住居に付属する建物の資料を網羅的に抽出し、絵画資料と発掘資料を総合的に考察し付属建物の特徴を明らかにした。さらに附属建物の建築工程や寸法体系を分析・考察し、住居とは異なる可能性を明らかにした。

**第6章　絵画資料から見たアイヌ民族の仮設建物**

絵画資料から、狩猟小屋などの仮設建物を抽出し、仮設建物の特徴を明らかにした。

**第7章　アイヌ民族の建築の特質と今後の研究課題**

住居、付属建物、仮設建物の全体を俯瞰し、建築全体の特徴と変遷過程を明らかにした。同時に、残された19世紀後半から20世紀初頭の研究の空白期間の研究課題を示し、アイヌ民族の建築を「建築文化」として捉えるための残された研究課題についても提示した。